



大学図書館問題研究会第 33 回京都支部総会 を開催しました

日 時：2010 年 7 月 23 日（金）19:30-20:30
場 所：季節料理 門（京都市左京区田中門前町 8）
参加者：12 名

- 【第 1 号議案】2009 年度（2009.7～2010.6）活動総括及び
2010 年度（2010.7～2011.6）活動方針
- 【第 2 号議案】2009 年度（2009.7～2010.6）決算案及び
2010 年度（2010.7～2011.6）予算案、会計監査報告
- 【第 3 号議案】2010 年度大学図書館問題研究会京都支部役員候補

支部事務局から第 1～3 号議案について提案と説明があり、質疑・検討の後、原案のとおり了承されました。

当日の議事メモ・補足事項等については [ページをご覧ください](#)。

2010 年度は別記、「2010 年度大学図書館問題研究会京都支部役員」を中心に、「2010 年度（2010.7～2011.6）活動方針」及び「2010 年度（2010.7～2011.6）予算」に沿って支部活動を運営していきます。引き続き、支部活動へのご参加と支部運営へのご協力をお願いいたします。

[目 次]

大学図書館問題研究会第 33 回京都支部総会を開催しました	…	1
2009 年度活動総括及び 2010 年度活動方針	…	2
2009 年度決算案及び 2010 年度予算案、会計監査報告	…	6
2010 年度大学図書館問題研究会京都支部役員	…	8
大学図書館問題研究会第 33 回京都支部総会 議事メモ・補足事項	…	8
大図研京都ワンディセミナー参加報告	…	10
大学教育改革のただ中、図書館員の『営業』的アプローチとは	安藤 誕	… 10
教員と連携して効果的な情報リテラシー教育を実現するために	梶谷 春佳	… 12

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm

<h2 style="margin: 0;">大学図書館問題研究会第 33 回京都支部総会議案</h2>
--

2009 年度 (2009.7～2010.6) 活動総括及び

2010 年度 (2010.7～2011.6) 活動方針

1. 2009 年度活動総括

(1) 研究交流活動

2009 年度は以下のように、2009 年 11 月、2010 年 3 月、2010 年 6 月に大図研京都ワンドイセミナーを開催し、3 回程度のセミナー開催を目標とした年度目標を達成できました。1 回目は、サービス提案をテーマにしたグループワークを取り入れるという初の試みでした。2 回目は図書館員によるアプリケーションの開発とそれを支える体制をテーマに、3 回目は、情報リテラシー教育における図書館員と教員の連携をテーマに行いました。いずれの回も当日実施したアンケートで好評をいただいています。

また、セミナー広報については、従来のメーリングリスト等の他、昨年度から開始した案内チラシの送付対象に京都市内の大学の司書課程も追加しました。さらに、京阪神の大学図書館へのメールでの案内も展開しました。加えて、Twitter アカウント「daitokenkyoto」による広報も開始しています。

以上により、セミナー参加者数の大幅増を実現しました (2008 年度参加者総数：73 名。2009 年度参加者総数：115 名)。

なお、セミナー運営については、当日の運営への参加を募るなど、参加者との協働の試みもスタートしています。また、アンケート調査を行い、適切な参加費設定の検討を進めています。

1) 大図研京都ワンドイセミナー「これからの大学図書館について考える：そのための視点と手法」

日時：2009 年 11 月 21 日 (土) 13:30～16:45

講師：井上創造先生 (九州工業大学)

場所：京都市国際交流会館 第 2 会議室

参加費：大図研会員は無料／非会員は 500 円

参加者数：24 名

2) 大図研京都ワンドイセミナー「サービス向上・業務効率化に使えるアプリを企画し試行提供する」

日時：2010 年 3 月 22 日 (月・祝) 13:30～16:40

講師：前田朗氏 (東京大学社会科学研究所図書室)

場所：京都市国際交流会館 第 3・4 会議室

参加費：大図研会員は無料／非会員は 500 円

参加者数：44 名

3) 大図研京都ワンドイセミナー「効果的な情報リテラシー教育を目指して：教育活動における教員と図書館員の連携」

日時：2010 年 6 月 12 日 (土) 13:50～16:40

講師：長澤多代先生（三重大学高等教育創造開発センター）

場所：京大会館 211号室

参加費：大図研会員は無料／非会員は500円

参加者数：47名

(2) 支部報

発行期日の遅れは生じましたが、年度当初にコンテンツ作成計画を策定し、計画的発行に努め、所定の号数を発行しています。これによりセミナー等の感想や参加報告を掲載し、セミナー等に参加できなかった支部会員への情報提供をはかっています。

寄稿については、会員はもとより非会員からも幅広く得ることができましたが、会員に「発表の場を提供する」という目標の実現は、引き続いての課題です。

また、バックナンバーの電子化・保存を開始し、併せて、過去発行号の目次を遡及して支部サイトに掲載しています。この作業の完遂とこれに併せた国会図書館等への納本は、継続課題となっています。

なお、今年度発行した支部報の目次は、次のとおりです。

1) 支部報 No. 271 (2009/08/15 発行)

- * 大学図書館問題研究会第32回京都支部総会を開催しました
- * 2008年度活動総括および2009年度活動方針
- * 2008年度決算案および2009年度予算案、会計監査報告
- * 2009年度大学図書館問題研究会京都支部役員
- * 大学図書館問題研究会第32回京都支部総会 議事メモ・補足事項
- * 京都支部ワンディセミナーに参加して(伊賀由紀子)
- * 大図研京都支部ワンディセミナーの感想(久保山健)

2) 支部報 No. 272 (2009/10/15 発行)

- * 大図研京都ワンディセミナーのご案内
- * 支部委員 挨拶
- * 第40回全国大会報告
- * 大図研京都支部忘年会のご案内

3) 支部報 No. 273 (2009/12/15 発行)

- * 新春合同例会のご案内
- * 10年続く勉強会：京都大学図書系職員勉強会の紹介(石原三輪子)
- * カンボジア・大学図書館訪問記 etc(坂本拓)

4) 支部報 No. 274 (2010/02/15 発行)

- * 大学図書館問題研究会京都支部 ワンディセミナーのご案内
- * 大図研京都ワンディセミナー参加報告 はじめての大図研(谷航)
- * 第11回図書館総合展報告：二度の出展を通して感じたこと(池田貴儀)

5) 支部報 No. 275 (2010/04/15 発行)

- * 大図研京都ワンディセミナーのご案内
- * 大図研近畿4支部新春合同例会参加報告 大学図書館とキャラクターについて(谷本千栄)

- * 「図書系職員のためのアプリケーション開発講習会」にみる講習会モデルとサービス向上・業務効率化への取り組み(大西賢人)
- * 興味や思いをかたちに変える～アプリケーション開発講習会の魅力(吉田弥生)
- * 外付け機能が面白い！図書系職員が企画開発するアプリケーション(是住久美子)
- * 第11回灰色文献国際会議参加報告(池田貴儀)

6) 支部報 No. 276(2010/06/15 発行)

- * 大学図書館問題研究会第33回京都支部総会のご案内
- * 大学図書館問題研究会第33回京都支部総会議案
- * 京都支部委員の募集について
- * 京都支部 Web サイト移設等のお知らせ
- * 大学図書館問題研究会第41回全国大会のご案内

(3) Web サイト、メーリングリスト、メールマガジン

ホームページでは、イベントのお知らせや、支部委員会の報告等、支部活動の記録を定期的かつ迅速に掲載しています。2010年6月30日現在、8,405アクセスを得ています(アクセスカウンター設置:2006年8月22日)。今年度よりアクセス解析を開始し、Web サイト充実の検討材料としています。また、Web サイトおよびML「yurikamome」の運用について、独自契約プロバイダから本部契約プロバイダのサイトへの移行を完了しました。これにより、契約費用の圧縮とともに、今後のコンテンツ充実に備えた容量アップを実現できました。

メールマガジンは、「大図研京都支部 NewsLetter」として、no. 84 (2009年8月7日) から no. 107 (2010年6月29日) を発行しました。支部委員会議事録、支部企画案内等を随時送信することで支部活動をお知らせするとともに、月1回のイベント案内を定期的に発行し、好評を得ています。

(4) 組織活動

会員数は、2010年7月1日現在65名で、2009年度当初から1名の減少です。図書館から異動等に伴う退会がありながらも、新規会員を得ることでできています。これは、セミナー案内チラシへの入会案内同封や個別の勧誘等も積極的に行うなどした結果、セミナー参加者から入会者を得るなどの成果に繋がったものです。

(5) 財政

昨年度に引き続き、会費納入率の向上に努め長期滞納者0名を実現できています。また、所定の会費徴収スケジュールに則った計画的な督促業務を行うことによって、低い未納率も維持できています。なお、各年度の未納率は次のようになっています。2007年度2%、2008年度4%、2009年度12%、2010年度58%(2006年度以前は0%。休会扱い1名を含む)。

(6) その他

全国大会では、支部会員から意見を募った上で大図研の運営改善等に関する提案を行いました。また、大図研 Web サイトの更新プロジェクトについても提案を行っています。

その他、例年どおり「大学の図書館」うち、1号の編集を担当しています。

2. 2010 年度活動方針

(1) 研究交流活動

会員のニーズに応じた研究活動の充実をはかり、会員の専門的力量形成と交流に役立てるため、セミナー等を2回以上、開催します。また、積極的な参加と交流の実現のため、セミナー企画段階からの参加募集を試行します。適切な参加費設定の検討も引き続き進めていきます。なお、地域における積極的な参加を促すため、京都および周辺地域の大学図書館等、関連する組織への広報も継続していきます。

(2) 支部報

定期発行と正確で読みやすい誌面の作成とともに、広く寄稿を求めかつ連載記事を企画することにより、コンテンツの一層の充実に努めます。また、自己啓発や会員間交流の場としての支部報のみならず、より多くの会員に「発表の場を提供する」支部報となるよう引き続き努力します。なお、バックナンバーの電子化・保存および過去発行号目次の支部サイトへの遡及掲載作業を進め、国会図書館への納本及び大学図書館への寄贈の実現を図ります。

(3) Web サイト、メーリングリスト、メールマガジン

京都支部の活動に関する情報をわかりやすくかつ迅速に提供するため、Web サイトを随時更新します。とくに支部報記事の電子化による積極的な公開や会員リンクの充実など、コンテンツの拡充と会員間コミュニケーションの促進を一層強化します。また、メールマガジンの定期的な発信を継続するとともに、Twitter アカウントの積極的活用を模索します。

(4) 組織活動

大学図書館問題研究会および京都支部の活動を説明し、会員を増やす活動を進めます。セミナーをはじめあらゆる機会をとらえ、関連組織への広報の実施と入会の勧誘に努めるだけでなく、魅力的な会報づくりや有益なセミナーの開催、会員交流の場の提供等、充実した支部活動を行います。

(5) 財務

所定の会費徴収スケジュールに従い、個々の会員へ個人別会費納入状況のお知らせや振込用紙の発送を行うことで、会費納入率を維持します。また、長期滞納者を作らないため、滞納の兆候が見られた段階での積極的な督促を行います。なお、節約の結果として積み立てられた予備費を効果的に活用する方策として、有料の講師や連続セミナーに向けての積立金を作成するものとするなど、研究交流活動の一層の充実策を引き続き検討します。

2009年度(2009.7~2010.6)決算案及び
2010年度(2010.7~2011.6)予算

2009年度決算案(2009.7~2010.6)

総収入	総支出	差引残高
840,454	523,867	316,587

■収入の部

項目	予算	決算	差引額	備考
前年度繰越金	351,374	351,374	0	
2010年度会費	0	182,000	-182,000	26名(@7,000円)
2009年度会費	287,000	231,000	56,000	33名(@7,000円)
2008年度会費	56,000	35,000	21,000	5名(@7,000円)
2007年度会費		0		0名(@7,000円)
支部報購読会費	0	0	0	0名(@2,000円)
セミナー参加費	22,500	31,000	-8,500	11月(4,500円),3月(12,000円),6月(14,500円)
寄附金	0	10,000	-10,000	
口座利子	0	80	-80	
合計	716,874	840,454	-123,580	

※会費内訳(本部会費4,500円+支部会費2,000円+支部還元金500円)

■支出の部

会報	80,000	47,510	32,490	印刷(14,500円)/送料(33,010円)
研究交流会費	210,000	157,458	52,542	11月(56,498円),3月(63,030円),6月(37,930円)
支部活動費	30,000	0	30,000	
事務費	20,000	14,505	5,495	会費振込手数料(3,840円)
HP維持費	16,380	16,380	0	
口座税金	0	14	-14	
本部会費	220,500	288,000	-67,500	64名(@4,500円)
予備費	139,994	0	139,994	
合計	716,874	523,867	193,007	

2010年度(2010.7~2011.6) 予算案

□収入の部

項目	予算	備考
前年度繰越金	316,587	
2010年度会費	259,000	37名*7,000円
未納会費	77,000	2009年度:8名*7,000円
		2008年度:2名*7,000円
		2007年度:1名*7,000円
支部報購読会費	2,000	1名*2,000円
セミナー参加費	15,000	
合計	669,587	

□支出の部

会報	60,000	印刷費(20,000円)/送料(40,000円)
研究交流会費	160,000	
支部委員活動費	30,000	
事務費	20,000	
HP維持費	3,000	
研究交流会積立金	100,000	
本部会費	216,000	48名(@4,500円)
予備費	80,587	
合計	669,587	

2009年度大学図書館問題研究会京都支部会計監査報告

帳簿および現金は適正に保管・記載されていた。

2010年7月23日

呑海 沙織 (印)

原竹 留美 (印)

※ 現金の動きを明確にするため、本部会費を収入・支出に計上しました。これにより2009年度予算が修正されています。

決算

- ※ 高い水準の会費納入率で、多くの収入を得ています
- ※ セミナー企画に多くの非会員の参加があったため、多くの参加費を得ました
- ※ 1件の寄附を受けました
- ※ 事務費の内訳は主に事務用品と督促状発送費と会費振込手数料です
- ※ その他特に不測の支出はありませんでした

予算

- ※ 新年度会費が半数以上未納、前年度会費の未納数も増えているので、更なる督促を必要とします
- ※ 京都支部の Web サイト・ML・メールアドレスを本部維持サーバに組み込んだため、HP 維持費が減額しています
- ※ 1号議案により、研究交流会目的の積立金を設定しています
- ※ 会報を現状に合わせて圧縮し、その分を研究交流会費に充当しました

2010 年度大学図書館問題研究会京都支部役員

支部委員 (50 音順)

- 赤澤 久弥 (奈良教育大学学術情報研究センター図書館)
- 安東 正玄 (立命館大学図書館)
- 池田 貴儀 (日本原子力研究開発機構研究技術情報部)
- 金森 悠一 (京都教育大学附属図書館)
- 坂本 拓 (京都大学工学研究科・工学部地球系図書室)
- 辰野 直子 (京都大学農学研究科生物資源経済学専攻司書室)
- 長坂 和茂 (京都大学経済学部図書室)
- 西野 紀子 (立命館大学図書館 (委託職員))
- 野間口 真裕 (京都大学経済学部図書室)
- 山下 ユミ (京都府立医科大学附属図書館)

監査委員

- 呑海 沙織 (筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)
- 原竹 留美 (滋賀医科大学附属図書館)

全国委員

- 長坂 和茂 (京都大学経済学部図書室)
-

<大学図書館問題研究会第 33 回京都支部総会 議事メモ・補足事項>

会員の皆様に支部総会当日の様子を知って頂くために、簡単に当日の様子をお知らせします。

1. 赤澤支部長から第 1 号議案について説明があり、原案のとおり了承されました。
2. 渡邊支部委員から第 2 号議案について説明があり、原案のとおり了承されました。
3. 支部委員、監査委員、全国委員については、第 3 号議案のとおり選出されました。

○2号議案については、以下の補足説明がありました。

全体

- ・ 現金の動きを明確にするため、本部会費を収入・支出に計上した。これにより 2009 年度予算が修正されている。

決算

- ・ 高い水準の会費納入率で、多くの収入を得ている。
- ・ セミナー企画に多くの非会員の参加があったため、多くの参加費を得ている。
- ・ 事務費の内訳は主に事務用品と督促状発送費と会費振込手数料である。

予算

- ・ 新年度会費が半数以上未納、前年度会費の未納数も増えているため、更なる督促を必要とする。
- ・ 京都支部の Web サイト・ML・メールアドレスを本部維持サーバに組み込んだため、HP 維持費が減額している。
- ・ 1号議案により、研究交流会目的の積立金を設定している。
- ・ 会報を現状に合わせて圧縮し、その分を研究交流会費に充当した。

○次の質疑応答がありました。その場でお答えした内容に事後の補足を含めて、支部からの回答とさせていただきます。

発言：セミナーの企画運営について、支部委員以外との協働を検討するとあるが、セミナーに限らず、興味関心がある事項についても、協働を募ってもいいのではないか。

回答：セミナー参加をきっかけに入会してくださる方もいることから、より積極的に活動に加わっていただく機会としてあげているが、この限りではなく検討したい。

発言：会費について 7000 円は高いのではないか。

回答：うち本部会費が 5000 円であり、これが下がらない限り、値下げは難しい。なお支部として、現在と同様の活動を続けていくには、100 名程度の会員数が必要であり、「専門職団体に参加すること」の意義とあわせて、会員としての実質的なメリットを明に打ち出していく必要は認識している。

発言：支部 Web サイトのアクセス解析を始めたとあるが、分かったことを説明してほしい。

回答：セミナー開催に関わる情報をアップしていない時のアクセスはたいへん少ないことが分かった。よって、セミナーを開催することは、Web サイトアクセス増の観点からも支部活動の露出を高めることにつながると言える。

発言：試行的にはじめた Twitter 運用は、新年度からどのように展開していくのか。これまではセミナー等の広報媒体として使っていたというが、セミナーの内容を実況する使い方については、どのように考えるのか。

回答：これまでセミナーは参加費をとっている関係上、実況はしてこなかった。ただし、講演の要点のみ流す、もしくは実況はするが、質疑応答は実際の参加者に限る等の差別化など実際の参加への呼び水となるような使い方はあると考える。なお、これまでフォローはしてこなかったが、会員をフォローすることやフォローされたらフォローを返すなどの運用もあると考える。いずれにせよ、Twitter は試行的に始めたものであり、新年度ではより効果的な活用方策を検討したい。

発言：「大学の図書館」の1号を担当していると議案にあるが、具体的に示したほうがいい。

回答：2009年は8月号を担当し、「大学図書館と文書館の連携」を特集した。2005年以降の担当号と特集は次のとおり。

2005年5月号「企画展示」、2006年9月号「図書館員の研修制度」、

2007年9月号「図書館と利用者とのコミュニケーション」、

2008年9月号「わが図書館をブランドにするために！」

なお、2010年は9月号を担当しており、「蔵書構築」を特集する。

支部総会は、会員の皆様からのご意見・ご提案をいただき、また前年度の支部活動を総括し、次年度の方針を決定する重要な場です。ついては、会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

今回いただいた貴重なご意見をふまえて、今後の支部活動を運営していきます。

引き続き、支部活動へのご参加と支部運営へのご協力をお願いいたします。

支部活動へのご意見・ご要望等がありましたら、ぜひ電子メール kyoto@daitoken.com (大学図書館問題研究会京都支部) までお寄せください。

大図研京都ワンディセミナー「効果的な情報リテラシー教育を目指して」参加報告

大学教育改革のただ中、図書館員の『営業』的アプローチとは

安藤 誕

梅雨入り間近ながらよく晴れた6月12日午後、京都大学会館にて行われた本セミナーに参加させていただきました。

「大学力」が問われる昨今、大学の一組織として図書館がどのような存在意義を示すのか、教育現場にどうアプローチすべきか、また教員との関わりを職員としてどのように築き上げるか、難しい問題が図書館には山積しています。

今回は、その只中にいる悩み深き図書館員の参加が大変多く（私もそのひとり）この問題に対する関心の高さが伺えました。

そして講師の三重大学高等教育創造開発センター・長澤多代先生からは、教員・図書館員双方の立場を理解される方として、貴重なお話を伺うことができました。

今回は、主に長澤先生が研究対象とされてきた Earlham College の手法や、国内における各大学の取り組みを取り上げながら、図書館および図書館員の行うべきアプローチ手法を具体的にご提示いただきました。

まず「大学教育改革と図書館」では、大学の置かれた現状を認識した上で「三つの方

針」即ち学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）の3点を策定し、その上でカリキュラムの体系を「見える化」することが重要とのお話でした。これは「大学の質の保証」に対して教職員が共通認識を持つ、分かりやすい基準と感じましたが、一方全学体制で行う課題だとも感じました。

この中で「単位の実質化」1単位を標準45時間の学習（教室内外合わせて）を要する教育内容と捉える、という指針をお教え頂きましたが、一方学校外ではほとんど学習の時間を取っていない、という学生の現状も併せて示され教室外学習の充実が喫緊の課題であることに驚きと納得の両方の反応が会場全体に感じられました。

この状況下、図書館の果たすべき責務を何と捉えるべきでしょうか。

- ・導入教育への参画
- ・各科目に対応する情報利用指導（科目関連指導）
- ・パスファインダーによる学習成果の向上への取り組み
- ・教室外学習時間を支援する設備環境の整備
- ・FD等による教員支援
- ・SD（スタッフ・ディベロップメント）による自らの専門性向上

今回は主にこれらの点が示されました。

導入教育への参画は、各大学すでに実施されていると思いますが、一般的には「レディメイド型」で全初年次者に共通した内容を取られているかと思えます。長澤先生は情報探索ポータルとして「GeNii」を活用されているとのことでした。

一方、「科目関連指導」は「テラーメイド」型の指導であり、かつての図書館では、仮に教員からこういった依頼が来ても人手不足などでお断りしていた現場が少なからずあるのではないのでしょうか（私の思い込みでしたらすみません）。

「科目関連指導」の立ち上げは、学期の始まる前から講義要項を総覧して支援対象（特にレポートやプレゼン等課題探究型の科目）を選び、担当教員に対して図書館のサポートが必要か働きかけを行ないます。

支援を行うと決まったならば、シラバスを読み込み、課題に対する情報源を検討してパスファインダーを作成しWebで公開をします。そして実地指導ではパスファインダーを提示しながら具体的な説明を行う、という段階的な実施設計が求められます。教員との連携は長期に渡り綿密なものとなり、コミュニケーションで信頼関係を築くことができるでしょう。また同手法を長年実施しているEarlham Collegeでは、担当することで新たな分野を学んだ図書館員も多いとのことでした。

科目関連指導の要点は「教える好機」を逃さない、つまりテーマが与えられた直後、学生の意識が高い時に効果的な支援を行うことと強調されていました。

そして、学生の情報探索能力向上は勿論、情報利用のプロセス全体を理解すること、また学生が図書館（員）を自分たちの学習を支援してくれるところ（人）と認識することの3点が指導の目的です。

講師からは指導の評価は、実施回数ではなく教員の満足度により測るべきという注意もあり、実際Earlham Collegeでは「学生のレポートの質が向上した」「教員自身も最新情報を得る手法を学べた」という評価が多く聞かれるとのことでした。

また参加者の注目はEarlham Collegeではシラバスに担当図書館員の名前を記載することにもあったのではないのでしょうか。往々にして日本の図書館運用法は「マニュアル式」であることが多く、「金太郎飴」式対応に重点が置かれるように感じますが、一方この事例は個々の図書館員の能力を活かす手法であり、さらに図書館員が「営業担当者」として機能することを表す、大変興味深い事例でした。

次は「パスファインダー」について。今となつてはこの言葉も図書館員にとっては当たり前のものとなり、私立大学図書館協会東地区部会企画広報研究分科会「パスファイ

ンダーバンク」などで共有化も広まりつつあります。しかし、実際にパスファインダーを作成するのは相応の労力が必要なのが事実です。

今回のテーマに沿ったパスファインダー作成の要点としては、トピックを絞り、各科目や課題の主題を反映させる、開講年度と科目名を見出しとしてWeb上で公開、といった手法でした。これはすなわちユーザーニーズを絞りこむことでもあり、学生にとってみれば自らの探索要求にぐっとハマり込んだ情報が提供されることで「図書館に支援してもらっている」と感じられるポイントとなることでしょう。

今回のセミナーでは「FDガイド」教員向けパスファインダーの事例も紹介されました。やはり単独で行うには労力もかかるため、大学間でのコンテンツ共用や、無理をせず不定期に、必要なものから作成する、という肩の力を抜いた取り組みをFD担当の長澤先生の立場からご紹介頂きました。これらも図書館とFD担当者が連携して行うことで、相互理解を深めるきっかけになると感じました。

指導手法やツールを学んだ後は「図書館員の役割」。長澤先生曰く、大学の中心にあるものは「教育・学習のプロセス」であり、図書館員はプロセスを向上させる「ファシリテーター」を担うべきと。しかも、従来の受け身型ではなく、学生や教員のニーズを予測し、教員に連携を働きかける「プロアクティブアプローチ」が求められる、と説かれました。

マクロレベルでは大学全体の教育計画や教務委員会の議事を確認し、推薦図書など学習支援の案内、学習スペースの情報などを提供する。部科・部局に対しては「課題探求のプロセスと情報利用の関係」に関する情報提供や、図書館ガイダンスの案内。教員レベルには新任教員の研修に図書館オリエンテーション実施を提案するなど、教員にも「図書館はサポートしてくれるところ」という実感を植えつけていく。さらに個々の教員へは科目関連指導やパスファインダーの作成を提案する、この様に各レベルに対応したニーズ把握と働きかけが必要でしょう。このあたり、図書館員が、実は苦手としてきたカテゴリではないでしょうか？アプローチは時に政治的に、あるいは営業的に行うことも求められるでしょう。

最後のテーマは「図書館員による教員へのアプローチ」。まず「ひとりの教員が満足すること」「各図書館員が担当教員を特定すること」が重要と話されました。

また、教員と連携した成果の授業モデルを「教員が他の教員に紹介する」機会を設ける、「口コミ」に頼るのも現実的手法です。実際、いくら図書館員（職員）が押しの一手で喧伝した所で、それが効果を生まない場合もあることを皆さん実感としてお持ちではないかと思いますが、長澤先生もまさにそれを仰られており、企画ひとつとっても「図書館」の名を出さず、FDセンター等と連携すると、また反応が違うことがあるとのことでした。

また図書館員が「図書館外で」活動を広く行うことも重要なポイント、とのことでした。「図書館員は内にこもり過ぎだ」との批判は度々聞かれる事で、私自身も大変耳の痛い話だと感じました。「図書館は専門用語ばかりでよくわからない」という教員の見方もまた然りで、長澤先生の「図書館は『カルピスの原液』」は正鵠を射た表現でしょう。教員にとっては「おいしいけど、濃すぎる」のだと。飲みやすく薄めてテーブルへ出さないといけないのですね。

蓋し日本の図書館員は、自らの存在を主張するように振舞っていなかったように思います。しかし「資料が電子化すれば『図書館』という殻はもういらぬ」「図書館員は『番人』の役割だけを担う」と揶揄されたりもする今、教学的方向へ積極的に働きかけを行うことが存在意義を示す絶好のチャンスではないでしょうか？

残る時間で質疑応答が行われ「院生への教育はどう展開すれば？」「私の大学ではこうやっています」など、質問に留まらず事例紹介も多く寄せられました。

「指導に対する学生からの評価はどのように吸い上げるべきか」との質問には、長澤

先生ご自身の事例として、学生自身が目標に対する達成度をポートフォリオで自己評価する手法を取っていると紹介頂き、また、アンケートを作成する時点から教員と連携すべきとの助言も頂きました。

また、私学にあっては業務委託が進み、柔軟な体制が取りづらい難しさも参加者より指摘がありました。しかし、業務委託だからできないという問題ではないのではないのでしょうか。どのような体制でも、全学的なポリシーを共有認識し、それぞれの役割を果たせば今回伺った内容は決して実現不可能ではないと感じます。

長澤先生のお話だけでなく、それぞれ異なる状況下、暗中模索で各々のアプローチを試されている皆さんのお話を聞いたことで、大学間で手法や成果を共有するネットワーク形成の必要性を強く感じた今回のセミナーでした。

あんどろ まもる

(株式会社同志社エンタープライズ・同志社大学ラーネッド記念図書館)

大図研京都ワンディセミナー「効果的な情報リテラシー教育を目指して」参加報告

教員と連携して効果的な情報リテラシー教育を実現するために

梶谷 春佳

去る2010年6月12日、京大会館にて、大図研京都ワンディセミナーが開催されました。講師は、三重大学高等教育創造開発センターの長澤多代先生¹です。以下、「大学教育改革と図書館」「科目関連の情報利用指導」「パスファインダー」「図書館員の役割」「図書館員による教員へのアプローチ」の5部構成で行われたご講演の流れに沿って、概要を報告致します。

「大学教育改革と図書館」— 大学教育改革における大学図書館の役割

まず初めに、教育の質的保証を目指す大学教育改革における図書館の役割について、単位の実質化などの観点からご説明下さいました。この3月まで学生だった私も初めて知って驚いたのですが、1単位＝教員が教室等で授業を行う時間＋学生が事前・事後に教室外で準備学習や復習を行う時間を合わせた標準45時間の学修を要する学習内容、だそうです。しかし総務省などの調査では、1週間の授業外学習時間は少なく、45時間には到底及びません²。つまり、単位制度を実質化し教育の質を保証するには、授業外学習時間の実質化が重要であり、それに向けた大学図書館の役割は、①学習成果の向上 ②ラーニング・コモンズといった授業外学習のための学習支援環境の整備 ③ファカルティ・ディベロップメント(FD)³等による教員支援 ④スタッフ・ディベロップメント等による専門性の向上が挙げられるとのことでした。

「科目関連の情報利用指導」— 効果的な指導に向けて

続いては、上記①を目指す取り組みの中でも、科目関連指導とパスファインダーに関するお話です。ここでは、科目関連指導とは何かから始まり、その到達目標や設計方法、実施の要点、教員側の利点についてご説明がありました。効果的な指導を行うためのポイントとしては、課題探求型の課題、すなわちレポートやプレゼンテーション課題のある科目を重点的に支援すること。次に、学期初めではなく課題のテーマ決定直後といっ

た高い学習効果が見込める教える好機に実施すること。また、一般的なテーマではなく課題のテーマに関する指導を行うこと、そして最後に、実施回数ではなく個々の教員の満足度に重点を置くことの4点が挙げられました。まずは1人の教員に満足してもらうモデルを作る—これこそが、他の先生方にも抵抗なく徐々に広められる方法だそうです。講演後に設けられた1時間の質疑応答・意見交換では、参加者の方々の図書館での事例も発表されたのですが、中には「図書館員が担当教員の研究領域を把握し、その先生が好きそうなキーワードを盛り込んで情報リテラシー教育を行う、そうすることで先生も喜びになる」、といった理想的な事例も報告されました。また、FD や図書館に対する認識には、教員によってかなり温度差があり、まずは関心の高い層から低い層へと繋げていくのが良いとのことでした。

「パスファインダー」— 情報探索のための道案内

科目関連指導の設計に当たって、図書館員はシラバスを読み、課題関連の資料やデータベースを検討してパスファインダーを作成します。要点としては、トピックが大きすぎると利用しにくいと、各科目や課題の主題を反映させること、開講年度と科目名を見出しにして図書館 Web 上で公開することの2点が挙げられ、名古屋大学⁴とアール・カレッジ⁵の事例が紹介されました。後者では、各ページに担当の図書館員の顔写真も掲載されていますが、顔が見えることによってカウンターなどでも相談しやすいように感じます。一方、三重大と名古屋大学では、教員のためのFDガイドが作成されています⁶。長澤先生曰く、FD や図書館員のためのパスファインダーがあれば助かるのでは、とのこと。ぜひ皆さんの図書館でも取り組まれてみてはいかがでしょうか？

「図書館員の役割」— 図書館員は“ファシリテーター”

先に大学図書館の役割について触れられましたが、では図書館員の役割は何なのでしょう？ 長澤先生が仰ったのは、図書館員は教育・学習プロセスの成果を向上させる“ファシリテーター”である、ということであり、教員がやりたいことを最大限発揮できるようにすることが大切だそうです。そして、事前対策的なアプローチ、すなわち大学全体・各部局・教員団・教員それぞれのニーズを予測・把握した上で連携を働きかけることが有効とのことで、各ニーズの捉え方とアプローチ方法についてご説明下さいました。対教員のアプローチに関しては、上述の科目関連指導の案内や図書館サービスの紹介などがありますが、このほか特に興味深く思われたのは、教員団へのアプローチです。例えばFD担当者や人事課などに対して、新入生オリエンテーションや新任教員研修での図書館によるオリエンテーションの実施を提案し、図書館が教育・研究のサポーターであるという印象づけを行うと良いそうです。新任教員へのアプローチは、教育活動面での連携にとどまらず、資料の受入など他方面でのやり取りも一層スムーズに進められるのではないかと思います。図書館が行う様々なサービスに対する理解を深めてもらう良い契機にもなり、広報面でのメリットも大きいのではないのでしょうか。また、図書館は専門用語が多くて分かりにくいので、カルピスのように薄めて出す必要があるとのこと。「パスファインダー」も、千葉大学では「授業資料ナビゲータ(PathFinder)」に改善されており、こうした分かりやすい名称の方が利用促進に繋がると考えられます⁷。

「図書館員による教員へのアプローチ」— 「北風と太陽」の太陽のアプローチを

最後に、図書館員は教員に対してどのようにアプローチすれば良いか、という実践的なノウハウのまとめがありました。科目関連指導では各図書館員が担当する教員を特定し、顔なじみになって図書館の窓口になる、といった身近なアプローチから、教員が他の教員に図書館と連携した授業モデルを紹介する機会を設ける、といったハイレベルなものまでご紹介下さいましたが、中でも印象的だったのは「北風と太陽」の比喻です。「図

書館と関わると面倒くさい」—そうした印象を一度持たれてしまうと、修正するのはなかなか難しいようです。教員間では情報交換がなされ、良い情報が回ると同様に悪い情報もまた回るとのこと。先生にマイナスの印象を与えてしまわぬよう、参加や利用を強制しないこと、強くアピールしないこと—「北風と太陽」の太陽のアプローチが重要とのことでした。食事会などインフォーマルな場で教員と交流することも有効だそうですが、その際も太陽のアプローチで。実は、アメリカでも図書館員側から積極的にアピールすることはないそうです。アクティブなイメージに反して意外に思いましたが、それだけデリケートで肝心な部分なのだと理解しました。

今まで私は、教員との連携について、教員の立場やFDの観点から考えたことはありませんでしたが、今回のワンディセミナーを通して、図書館という枠にとどまらず、大学全体や部局がどのような教育を目指しているかといった広い視野で考えること、教員の活動にも目を向けることの大切さを教えて頂きました。情報リテラシー教育やその他の図書館サービスを行う上で、学生がどのようなことを学び、どのような学習・研究方法を採っているかを把握することは極めて重要だと思うのですが、教員との連携を深めることによってそうした情報も得やすくなるのではないかと思います。そして、教育活動での連携において重要なのは、教員も図書館員も、学生の学習成果向上や効果的な教育の実現といった同方向の目標を持っているのだという意識を、両者の間で共有することだと感じました。

かじたに はるか (京都大学数理解析研究所)

- 1 “長澤 多代 (NAGASAWA Tayo)”. 三重大学 高等教育創造開発センター. 2010-07-05. <http://www.hedc.mie-u.ac.jp/nagasawa/>, (参照 2010-07-10). 長澤先生の過去の発表資料や論文は一部こちらで公開されていますので、是非ご覧下さい。
- 2 長澤多代. 教員と図書館員の連携による学術情報リテラシー教育. 国立情報学研究所, 平成21年度学術情報リテラシー教育担当者研修. スライド9, 10をご参照下さい。
- 3 「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」。具体例としては「教員相互の授業参観の実施, 授業方法についての研究会の開催, 新任教員のための研修会の開催など」。中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて (答申) 用語解説”. 文部科学省. 2008-12-24. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, (参照 2010-07-11).
- 4 名古屋大学附属図書館. 情報への道しるべ(授業資料ナビ). <http://pathfinder.nul.nagoya-u.ac.jp/>, (参照 2010-07-11).
- 5 “Guides Subjects: 2010 Spring Semester Courses”. EARLHAM COLLEGE LIBRARIES. <http://earlham.libguides.com/cat.php?cid=18765>, (参照 2010-07-11).
- 6 “教育開発のガイド”. 三重大学 高等教育創造開発センター. 2010-03-23. <http://www.hedc.mie-u.ac.jp/edguide/edguide.html>, (参照 2010-07-11). 名古屋大学 高等教育研究センター. “ファカルティガイド”. 名古屋大学 高等教育研究センター. <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>, (参照 2010-07-11).
- 7 鈴木宏子, 武内八重子, 中村澄子. 図書館による学習支援と教員との連携: 千葉大学におけるパスファインダー作成の実践から. 大学図書館研究. 2008, 83, p. 19-24. 千葉大学附属図書館. 授業資料ナビゲータのすすめ. <http://www.ll.chiba-u.ac.jp/pathfinder>, (参照 2010-07-11).

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2010年度(大図研会計年度2010.07 - 2011.06)に入っておりますので、2010年度の会費の納入をお願い致します。また、2009年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000)です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけてください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (kyoto@daitoken.com) まで。